

やがて、歩哨の合図で、五列縦隊の小隊は、屠殺場へ引かれる羊のごとく、黙々と作業場へ向かう姿は、体験者ならではわからぬ苦痛であつた。

二年目にはいつて、中隊全員で四階建て四十戸分の高級れんがづくりマンションを約一年間で完成した。作業中、最も苦しかったことは、地下三メートル凍るところのため、一メートル四角、三メートルの深さまでの基礎掘りを円びと鉄棒のみで仕上げる難作業で、一日三百五十グラムの黒パンと燕麦のおかゆの食糧では、日ごと衰弱が目に見えた。

二十二年四月になって、弱い者四百五十人がダモイの第一陣と発表され、将校は後にし、下士官の私が検診の結果、右肺が真っ黒であつたので、引き揚げ責任者として、辛苦の思い出のラーゲルを、お礼の挨拶を終わりに、踊る心を押さえて帰国の途に着いた。

懐かしい祖国へダモイの喜びの車中、一人が停車時に盗みをしたことが、ゲーペーウーの発見するところとなり、「あの兵はダモイはできない。即刻元のラーゲルに戻す」という。幾度か許しを嘆願したが、聞いてくれない。

やむなく最後に「どうしても駄目なら責任者の俺を返してくれ」と頭を下げたら、彼も人の子「それほど言うなら今度だけは許してやる」とダモイをともにすることができた。責任者としては、寸時も油断はできないと、いままさらながら痛感した。

ナホトカでの第一から第三の関所を経て、待望の舞鶴上陸は、五月十日、久しぶりに見る新緑の祖国の土を涙とともに踏みしめて、復員手続きを終わりに、懐かしい我が家に、親族に迎えられて着くことができた。

ソ連に連行されて

東京都 三井 清

それは十一月初旬の日だった。明日出発とソ連軍より命令があり、十一月十日ころ、鞍山駅を出発した。約四十五日間の汽車の旅だった。おろされた場所は、十二月半ば過ぎなのに、草などは青く暖かく、かなり南に来ていると感じた。約一時間くらい歩いて収容所に入った。

収容所は、三方に望楼があり、ソ連兵が着剣をして監視している。収容所の周りには有刺鉄線で三重に囲み、外側には電流を通していた。宿舎は二百人くらいはいれる棟が五棟と、炊事場、医務室で、収容所の真ん中に小川が流れていた。

食事は原米、小豆、コーリャン、アワ等のおかゆが主で、昼は黒パンに少量の砂糖等だった。

仕事は、用水池の堤防づくり。朝八時、正門前に、数えられやすいように五列に並んで、ソ連の人員点呼を受け、作業場に行く。三十分くらいで仕事場に着き、一輪車に土を入れて、堤防の上に積み上げて固くたく。

昼になるとラーゲルに帰り、昼食の黒パンだ。パンは固く酸っぱくて、汗を流しながら、食べる始末だ。午後と同じ仕事だ。そのうちにここはタシケントだとわかった。ソ連の民間人から聞いたのだ。

午後は五時ごろまで、約半年続いた。堤防工事にはドイツの捕虜も離れた場所で仕事をしていた。彼らの仕事ぶりは、作業始めの号令で一斉に仕事にかかり、休憩の号令が出ると、どんなときでも一斉に休む。日本人と

国民性の違いを目の前で見せつけられた。

日本人は、仕事始めでもなかなか仕事にかからず、たばこを吸いながら、だらだら仕事を始めるのだが、仕事に勢いがつくと、汗を流して、休憩時にも休まず、ドイツ人よりも早く確実に仕事をするのだが、ソ連人はインチキだといって争ったこともあり、営倉に入れられた。

春、暖かくなってきたら、マラリヤが発生し、二百人くらいの者が悩まされ、また鳥目になる者が多発した。

なにしろ青い野菜は全くなく、肉もなく、時々塩漬けの魚が出る程度で、入浴も二週間に一回くらいで、町の入浴場に一日がかりだ。

その後、町の綿の実から油をとる工場での仕事だ。貨車に積み込まれた綿の実をおろして、コンベヤーに乗せて工場に送り込む仕事だった。ここでは三交代で、我々のほかにウズベック、キルギス、カザック、朝鮮、中国、ロシア、等々の人種の人々が働いているのには驚いた。女も男も全く同じ仕事で、夜間も働いている。

この工場に一月ぐらい働いていたら、ソ連軍より、日本にダモイだと知らされて、二十二年四月ごろ、タシ

ケントを出発し、ハバロフスクから少し離れたセミヨノフカという町におろされた。その間二十五日間くらいの汽車の旅だった。

引込線の野原に四日間くらい野宿をして、五日間の食糧を持たされての行軍が始まった。先頭が出発してから、私たちは最後尾なので、一時間半くらいで歩き出した。五月のシベリアは、太陽が強く、一か月近く太陽に当たっていないので、苦労した。

峠の途中までくると、先を行った連中で、道の両側に倒れている仲間を見た。息もなく、死んでいる。どの顔を見ても紫色だった。日射病だと直感した。約二百人くらいだった。そのうち、ソ連のトラックが来て、丸太でも積むようにしてどこかに持って行った。行き先は不明だった。捕虜になって初めて悲惨な光景を見て、これから先どんなことになるか不安だった。

行軍をして四日目の夜、野宿をしている我々のところにソ連兵が来て、明日から仕事だと言われた。仕事はここから山に向かって道路をつくる仕事だった。山の中、家もなく、我々の野宿生活の始まりだ。道具はシャ

ベル、ツルハシ、ナタ、二人引き鋸だけだ。

私の隊は橋づくりの仕事だ。小さい橋は一日で完成のこと。長い橋でも三日間くらいで完成、以上がノルマだ。橋をつくるには、川上の山中に入って太い木を切り、川に流して目的地まで運んで、橋をつくるのだが、山に入ると山タニ、蚊、ブヨに悩まされた。特に山タニに刺されると命を失うときもあると言われて、肌を出さないで仕事をした。

周りにはソ連兵が鉄砲を持って見回っている。夜、寝る場所もなく、仕方なく細い木を切って三角の小屋をつくり、屋根は草を覆い、床は毛布を敷き、三十五人くらい一組になっている生活だ。

食糧は原米とアワが主で、他に油、塩で野菜、肉、魚などは全く支給されず、栄養失調になる者が続発した。やむを得ずアカザという草をゆでたり、山に入ってキノコを取って食べた。工事が進むにつれ、山の奥に行くのだが、雨が降っても小屋の中まで雨水が入るし、着物までぬれて、寒さも加わり、高熱を出す者も数多く出た。食糧も雨が降ると二日、三日と遅れて、一日中食はず

にいるときも何回かあった。シラミ、ブヨ、蚊には悩まされ、顔は青白くなり、体を動かす気力もなく、小屋の中に寝ているような人が多く出てきた。俺はもうだめだと言いついたりして、死んでいく者が出てきて、本当に悲惨この上なしだった。

また、蚊、ブヨのため、手足が化膿し、痛い手足を引きずっての作業だった。着物は破けて、敗れたところからブヨが入ったりして、仕事もできない始末だった。ソ連兵からは叱られるし、人間の地獄だった。こんな生活を十月下旬までさせられた。

やがて雪が降り出した。急に寒くなり、山をくだることになった。五月初め、山に入ってから、山をおりる間、約百五十人くらいの人が死んだようだ。この人たちは山の中に穴を掘って埋めてきた。山をおりるときは七百人くらいになっていたと思う。

山をおりてセミヨノフカの町に入り、我々は五十人、または百人くらいに分かれて、トラックで地方に分散させられた。私は十人くらいで町に残り、糧秣運搬の仕事だった。このときの生活は、山で道路作業をしていたと

きと天と地の違いで、仕事は軍から一週間に一回くる糧秣を各分隊に配る仕事だった。

時々ソ連の官舎の使役に使われるくらいだった。糧秣も原米が主で、肉、魚、野菜、砂糖、油等も多かった。また町に出るのもある程度自由で、町の民家にも行って、一般ソ連人の生活を知ることができた。

分散された者は、国道からの二キロから三キロ間の小屋に入り、山に行って電柱くらいの木を倒して、道路に出す仕事だった。切った木はトラクターが運び出すので、楽な仕事だった。午前午後二時間くらいの仕事だった。こんな生活が四月半ばまで続いた。

四月二十日ころ、ダモイのためナホトカに出発し、収容所に入った。驚いたことには、収容所の正門にレーニン、スターリン万歳の看板が出ていた。我々が階級章や正章をつけていたら、他の日本兵に叱られ、階級章も正章も取られた。こんなものをつけていると造反だと言われて、目を白黒した。

そして午前午後、共産主義の教育だった。講師は洗脳された日本兵だ。彼らは共産主義に共鳴し、ソ連の手先

に使われているのだ。そして破格の待遇を受けていた。

我々は共產主義には聞く耳を持たず、使役集合の号令が出ると、はだして飛び出し、収容所の裏山に行つてまきづくりが日課だった。

五月二日ころだった。帰国の船がくるので、身体検査と持ち物の検査を受けた。私は同輩の髪と爪を持っていたので、検査官に見つかからないようふんどしの尻に入れて隠し、なんとかみつからずに済んだ。この人は東京高島屋に勤務されていたので、帰国後届けた。

五月五日、乗船し、その晩出港だった。船上は明優丸という七千トン級の貨物船で梯団長はナホトカで共產主義の洗礼を受けた旧日本兵だ。この連中にナホトカでは相当苦しい思いをさせられたので、船中では大騒ぎとなったが、五月七日、無事に舞鶴に上陸ができて、よくぞ日本の土が踏めたという思いだった。

シベリア抑留体験記

大阪府 川 畑 克 志

終戦よりソ連領ウズベック共和国タシケント収容所到着までの道のりを申しますと、昭和二十年八月十五日終戦となりましたが、シベリア抑留の身となって奉天↓ハルビン↓黒河を経てブラゴエシチエンスクに到着（二十年九月初旬ころだったと思う）。部隊（千人単位の貨車輸送）ブラゴエシチエンスクからハバロスク↓ウラジオストクを経て日本に帰れると思ひ込んでいたため、途中の食糧は一人米四合、乾パンだけだった。黒河に着くと食糧も切れてしまったので、千人分のコーリャン三袋支給された（一袋八十キロ）。我々は日本に帰るのだから辛抱しようと戦友と励ましあったが、ブラゴエシチエンスクに着いたときは約百人が死んだ。ブラゴエシチエンスクに着いたときはバケツ一杯の水を持ち上げる気力もなかった。ここからが死との戦いだった。